Vol.7 ●とじこみスペシャル

COMICS & NOVELS!!

FANTASY LAND

ファンタジーランド



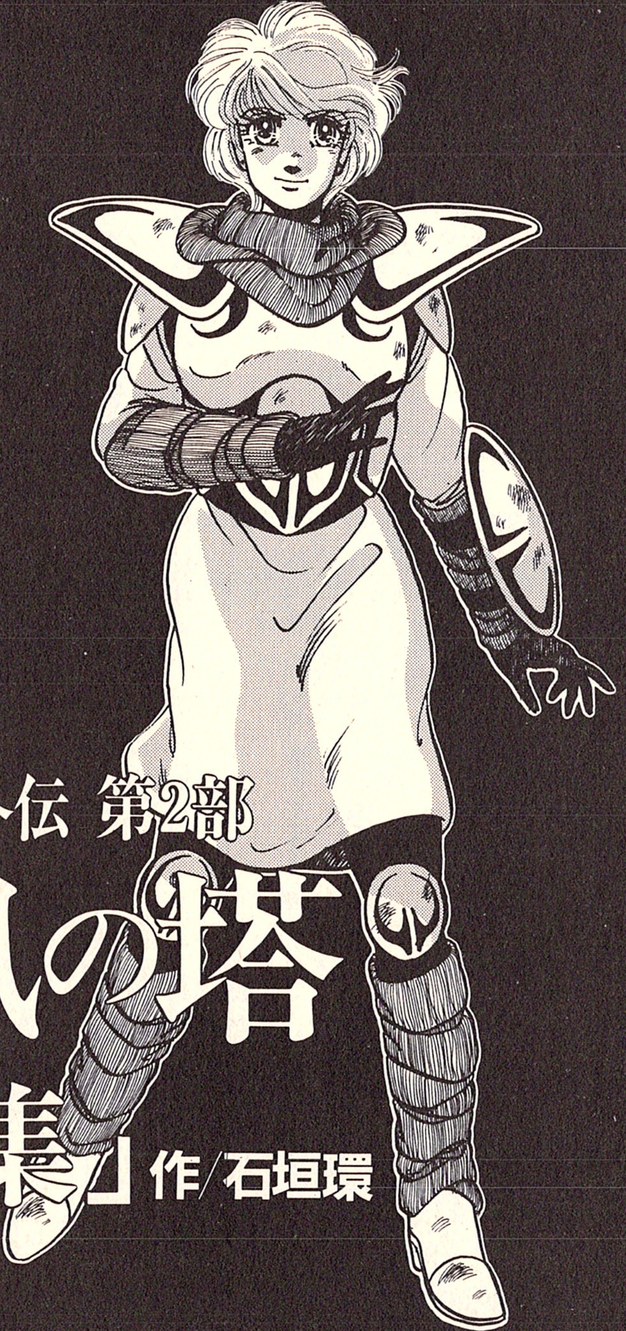
コミックと小説の新コーナー、絶好調です!!

RPGやAVGのようにハラハラドキドキコンピュータ・ゲームよりも面白いコミックスや小説が読みたいっ!!そんな欲ばりなあなたのためのコーナーです!!

CONTENTS

FANTASY LAND

Wizardry®



リィナ
性別：女
職業：僧侶
属性：善
性格：温厚
種属：人間族

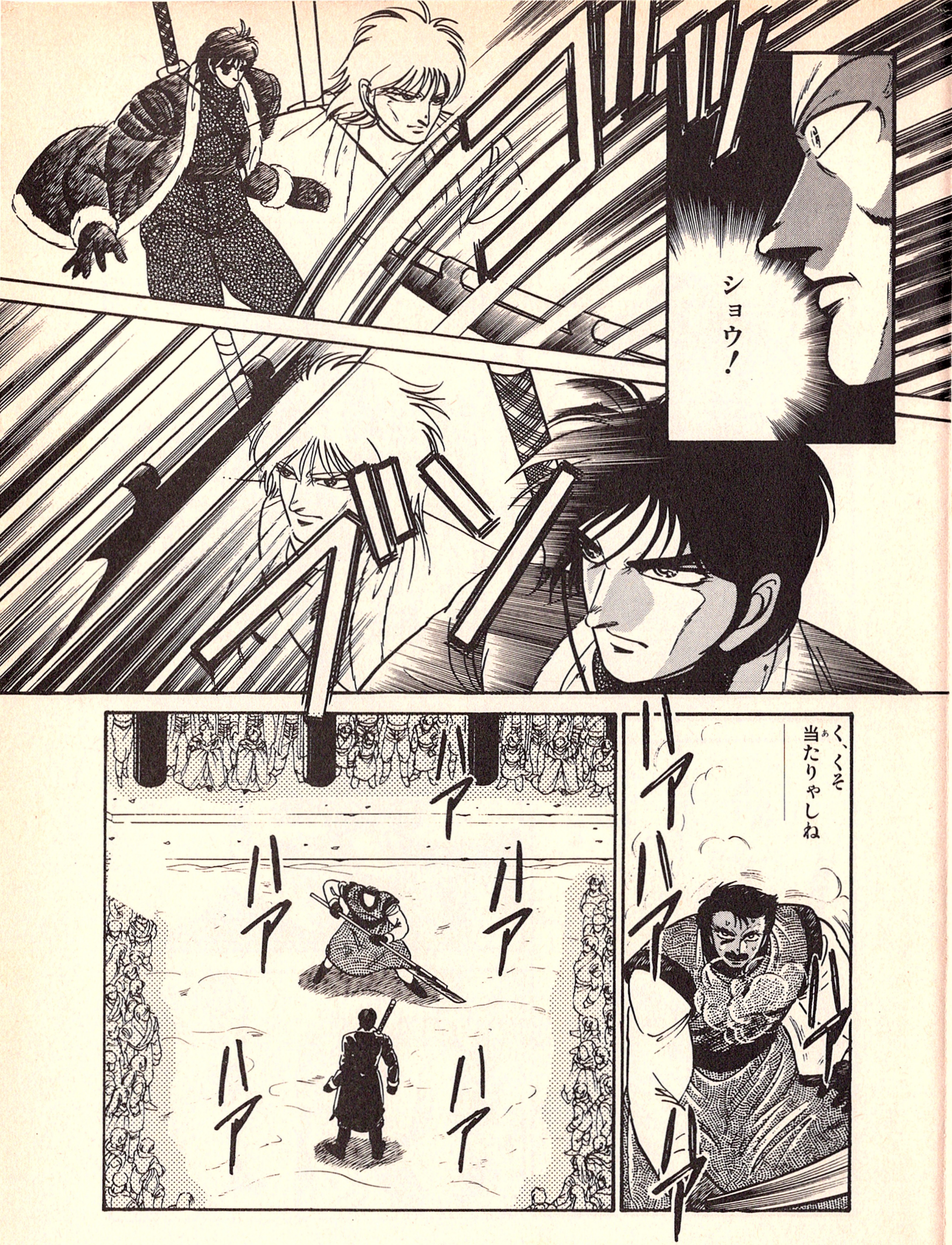
ウィザードリィ外伝　第2部

鳳凰の塔

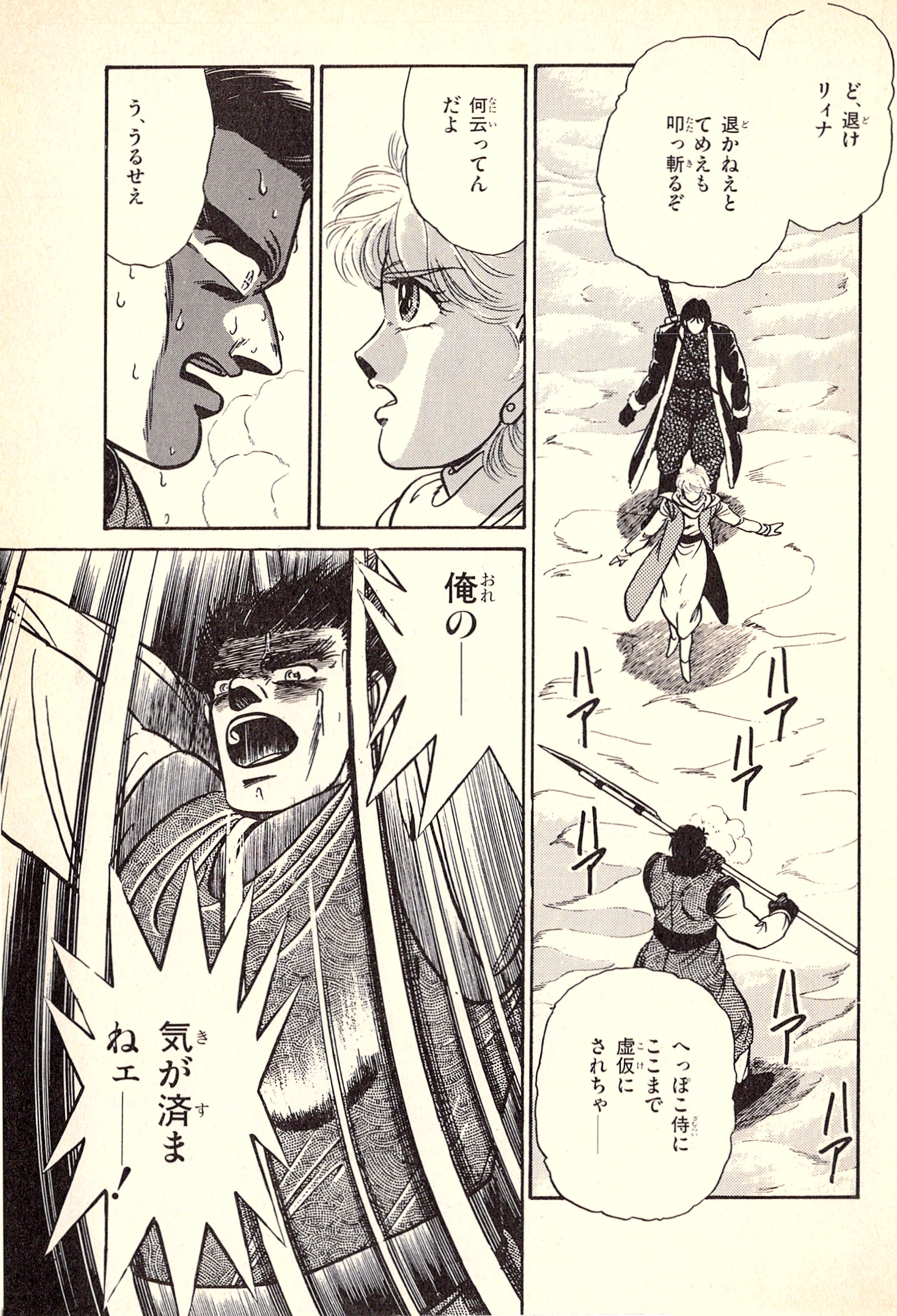
第3話「結集」作／石垣環

●前回までのあらすじ　およそ150年の時空を超えてイヅモの国へと跳ばされた一行。そこで修業をつむショウは、鳳凰の塔に伝説の宝刀クサナギが眠っていることを知る。力及ばぬ者が手にしたときその者は滅びの道を歩むという名刀を求め、ヒダカミの国へと向かうショウとサンザ。行く手をさえぎる謎の牢人達。炸裂する鳳龍の秘技！危機を脱した彼らの前に!?


ザワ
ザワ
ゴト
—ったく
使える奴が
いねえな
ん
ザワ
ザワ
ザワ
ザワ
何だ
またテツ
かよ——
相手は
先日の
展望台の
騒ぎで
生き残った
奴らしいぞ


ショウ!
く、くそ
当たりゃしね
ハァ ハァ
ハァ
ハァ
ハァ
ハァ
ハァ


通してはくれないか
無用の争いは好きじゃない――
う、うるせえ
ぬ、抜け刀を――
こ、腰抜け侍――
ハァ
ハァ
ハァ
よしなよテツ
あんたに勝目はないよ
何だこの娘



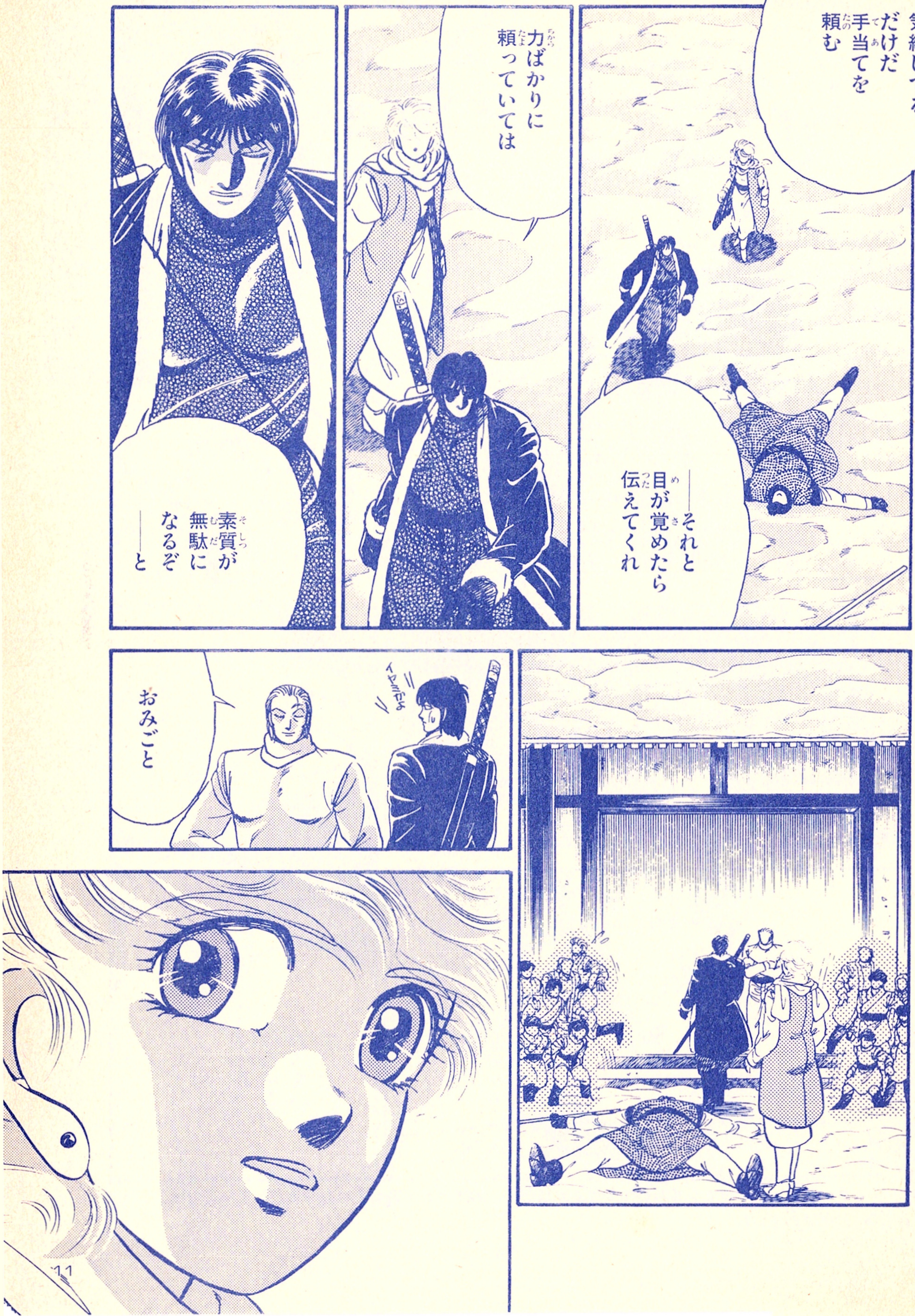
ど、退け
リィナ
退かねえと
てめえも
叩っ斬るぞ
何云ってん
だよ
う、うるせえ
ハア
ハア
ハア
ハア
ハア
ハア
へっぽこ侍に
ここまで
虚仮に
されちゃ——
俺の——
気が済ま
ねエ——!

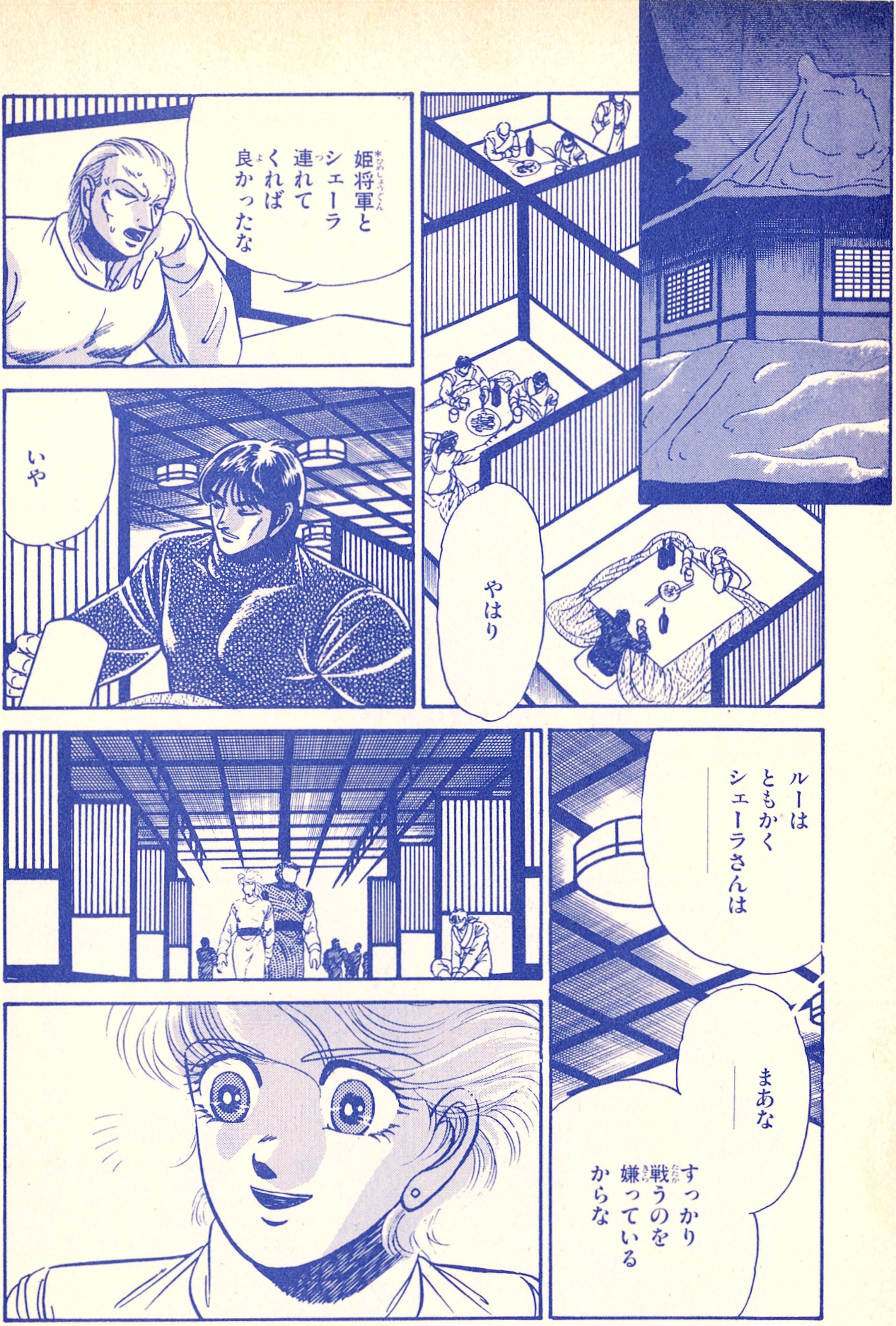


イッ
鳳龍透過波(ほうりゅうとうかは)




えっ
大丈夫だ


気絶してるだけだ手当てを頼む
―それと目が覚めたら伝えてくれ
力ばかりに頼っていては
素質が無駄になるぞ――と
おみごと
イヤミだよ

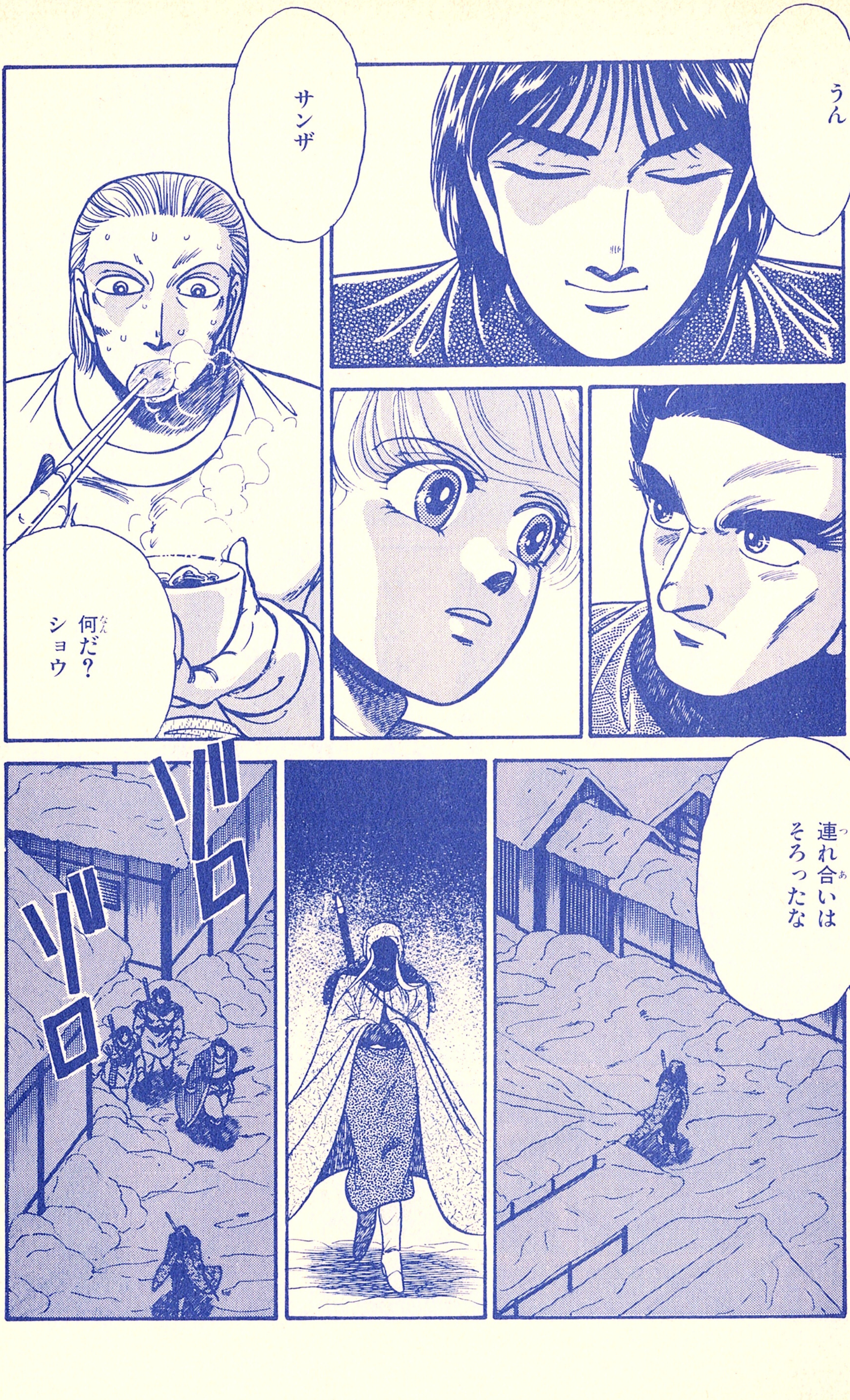


※ルーシィディティはリルガミン王国の王女でありながら、将軍として最前戦に立ち指揮していたため、「姫将軍」と呼ばれていた。


いたいた
ん
さ、先程は
ペこっ
わ、悪かった
す、すまん
ホラ
来なさいよ
フッ
座れよ
ホッ



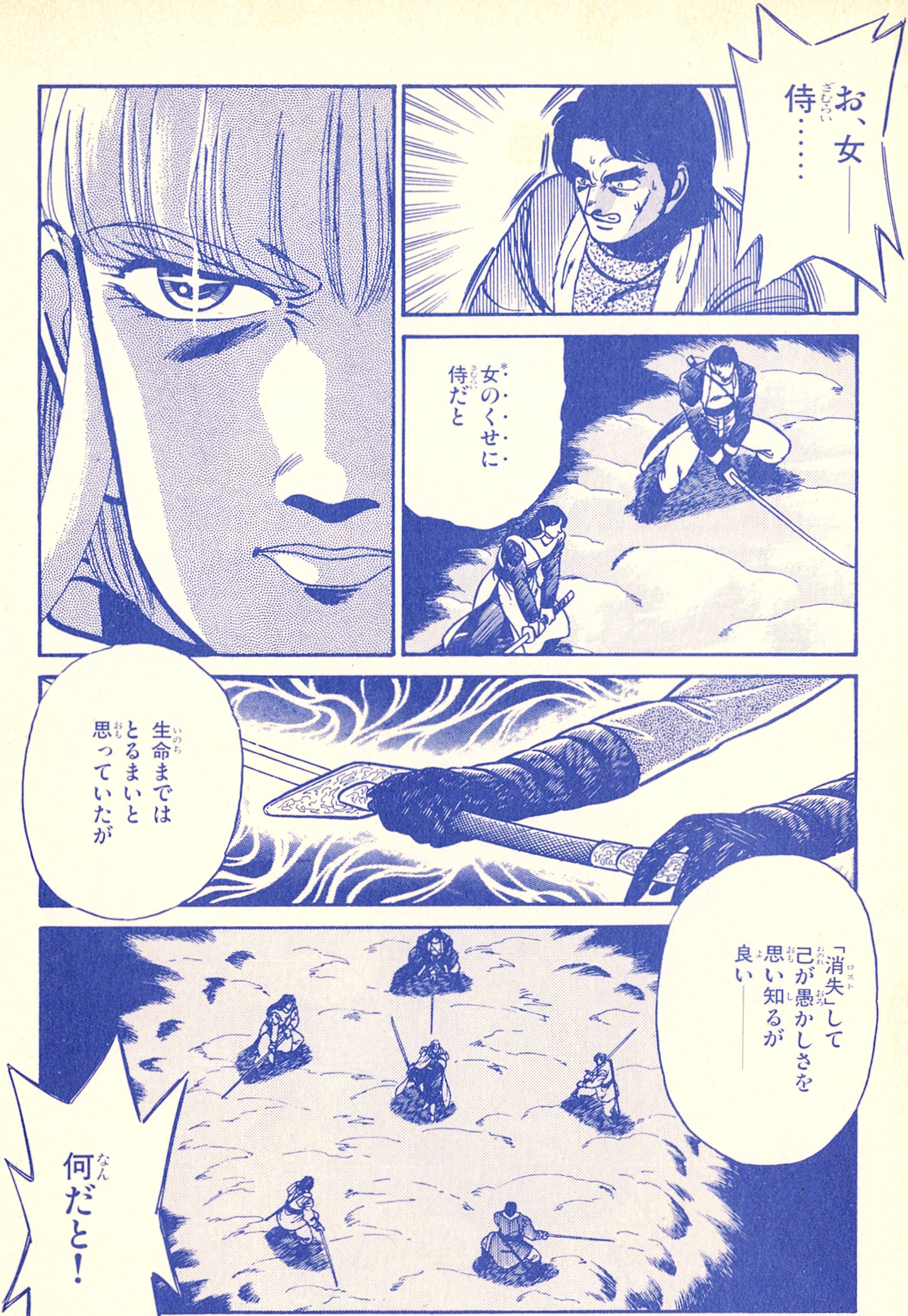
本当にすまない
侍の家に生まれたのに俺ときたら
物覚えが悪くて未だに戦士どまり
なもんで実力もねえくせに威張りくさる侍
バカッ
あ
構わない気にはしていない
気持ちもわかる
パクッ
つ、つい突っ掛っちまって


うん
サンザ
何だ？ショウ
連れ合いはそろったな
ザロ
ザロ


待ちな
いい刀持ってるじゃねえか
おめえにはもったいねえな
物盗りに成り果てた侍か――
いや侍と呼ぶのももったいないな
うるせえ!
刀を置いて行きさえすりゃいいんだ!!



やむを得ぬな
バサッ
ス
ッ



※「ホウライ」では、「侍」は特別な職種である。そのために女性が「侍」になることは、非常に疎まれる傾向がある。「ロード」とは別の理由で女性の進出が拒絶されている。但し、他の国々では、このような差別は見られない。


殺せ！

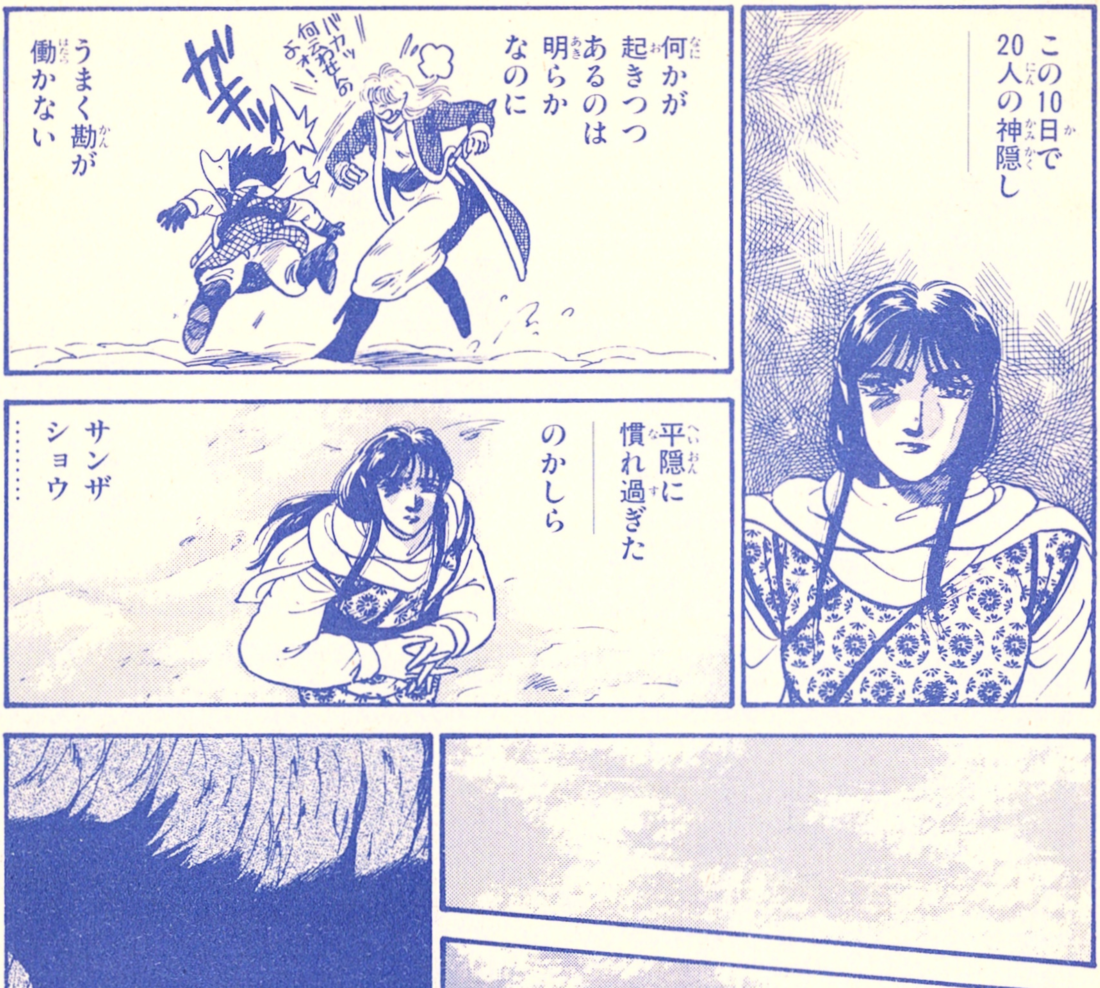

鳳龍四方斬(ほうりゅうしほうざん)


パ
同じ時代
同じ場所に
鳳龍の剣の
使い手が
2人――


さて――
ガワッ
オエップ
うえっ
でえっ
ザワッ
鳳龍四方斬(ほうりゅうしほうざん)――か
ショウ――さん どうしたの？
ひでえな
ゲロゲロ
いや―― さんづけは よしてくれ
リィナ


リィナだって……
イヅモの国
これで今月に入って20人目
毎日毎日見廻り おかげで遠出も……
バッ


くすくす
キョロキョロキョロ
ち、ちがうわよ！
私はただちょっと休みが欲しい……
いいのよ
それより
どうかしたの？シェーラ
え
う、ううん何でも



＊1「聖水」：「治癒（ディアル）」の呪文と同程度の威力を秘めている。少量でその効力を発揮するので、通常1・2個保持すれば十分に役立つのである。「水薬」（封傷（ディオス）」の呪文と同等の効果）とは比較にならない程の効力があるが、その分極めて高価でもある。　＊2「ギルの迷宮」 第5話「背教者」を参照。



次号(Vol.8 4月6日発売)につづく!! *TO BE CONTINUED*

Wizardry®

ウィザードリィ外伝第1部

ギルの迷宮

一気に読めば
10倍面白い。



石垣環・作

定価900円(税込)/発売中

ホウライ国の若き侍・ショウとリルガミンの
姫将軍ルーシィディティの宿命の戦いが始まろうとした瞬間。
2人の身体は奇妙な迷宮へと転移させられる。
彼らは、邪法を用いこの世界の平衡を乱そうと企てる
魔導士ギルを斃すために、ここへ召喚されたという。
ギルとの闘いがいよいよ始まる! 乞うご期待!!
(巻末特集/ウィザードリィ友の会ベスト編)

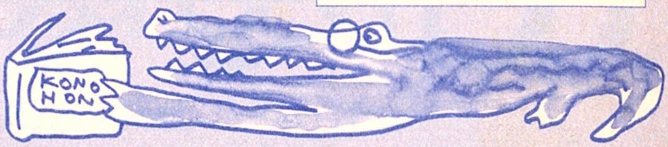
JICC出版局

☎03-234-4621

TVゲーム世代のためのスーパーブックガイド

この本を読め!!

by柴尾豊太郎



第三回『アビス』

オースン・スコット・カード著　角川文庫

映画も傑作。本も傑作

3年ほど前から、AVに凝りはじめるようになった。（ちなみにAVといっても『18禁』の世界じゃないよ）手始めに29インチのテレビを買って、LDプレーヤー、ドルビーサラウンドプロセッサー、スーパーウーファーなど買いそろえていき、気付いたときには六畳間の周囲に7個のスピーカーが渦巻き、350枚以上のLDが本棚1本分を埋め尽くしていた。

夜、部屋を真っ暗にして、よくできた映画を缶ビール片手に飲むというのが最高の娯楽だった。ちょっと暗い世界だね。

でも、へたな映画館よりずっと音はいいし、すぐとなりでペちゃくちゃしゃべりまくるやつや、じゃりじゃり音を鳴らしながらひどい匂いのハンバーガーを食うやつもいない。LDを買う分、多少お金はかかるにしても、車を買って、走らせるときにかかるお金のことを考えると、安いくらいのものじゃないかな。

ちょっと関係ないかもしれないけど、PCエンジンの『スーパーダライアス』がドルビーサラウンドだと聞いて、実は期待してるんだよね。うちのシステムで鳴らすとのめりこめそうじゃないか。

本のコラムだというのになかなか本題に入れなくてごめんなさい。今までの部分は自慢半分の前振りなのだ。

いまではかなり増えてしまったLDのコレクションなんだけど、思い返してみたら最初の1枚というのがジェームズ・キャメロン監督、アーノルド・シュワルツェネッガーの出世作の「ターミネーター」だった。

当時、この作品はちょっとしたインパクトをいろんな人にあたえていた。B級アクション映画のファンから、SFマニアの皆様まで、小粋でうまくて破壊的な「ターミネーター」のおもしろさはまさに衝撃的だった。まあ、ぐだぐだ言うより、見ている人だったらみんなうなずいてくれるはずだね。

キャメロン監督、つぎの「エイリアン2」でもさらにパワフルに楽しませてくれた。下手すると1作目よりすごいんじゃないか、そんな声があちこちから聞こえてきた快作だったね。ここまでの3作(「殺人魚フライングキラー」という処女作もあるんですね）ことごとく高水準で見せてくれた彼のつぎの作品が「アビス」だ。「リバイアサン」、「デプス」と立て続けに作られた深海アクション映画のなかで、決定版とか三度目の正直といわれた作品なのだ。残念ながらまだ見ていないんだけど、まず9割以上の確率でおもしろいはずだといいきってしまおう。何しろ、監督が監督だもの。

この映画のノヴェライゼーション（小説化作品）は去年の11月にでていたんだけど、その作者を見て、またびっくりしてしまった。オースン・スコット・カード！アメリカでいちばん活きのいいSF作家じゃないか。これほどの人がどうして人のストーリーで小説を書かなきゃならないんだ？

その疑問に対する答えはあとがきを読んでもらえばわかるけど、とにかく泣かせのうまいカードだけあって、最初の70ページを読んだだけで涙がでてくる。確実に一読に値する本なのだ。



➡「アビス(上、下)」オースン・スコット・カード著、角川文庫(各520円)あの名作「2001年宇宙の旅」以来、初の小説家と映画監督との協力作業から生まれた作品。なみのノヴェライゼーションとは違ったおもしろさを楽しめる。「読んでから見る」がいまから楽しみ

DRAGON LORE
最後の竜に捧げる歌II

SCENE3
フレシアの館



ファンタジーファン必読！
小説版、コミック版、
2冊の『最後の竜に捧げる歌』
絶賛発売中!!

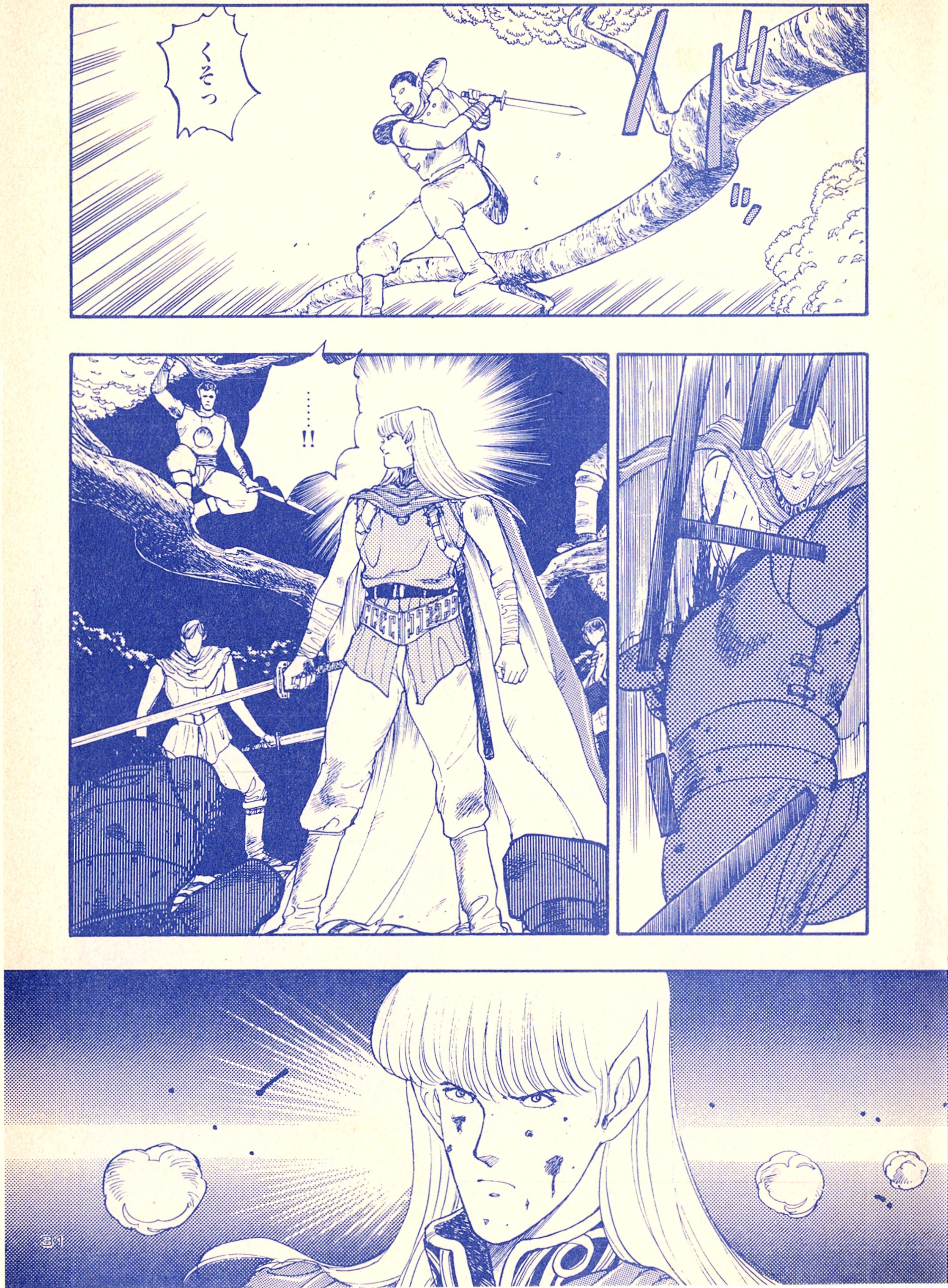
by 外薗昌也
原作/手塚一郎

●前回までのあらすじ／ネルザの森に師・フレシアをたずねたグレイだったが、フレシアはすでにグレイの兄弟子・アクィナスによって殺されていた。錬金術の闇の部分に魅せられてしまったアクィナス。ショックを受けたグレイに突然エルフたちが襲いかかった。

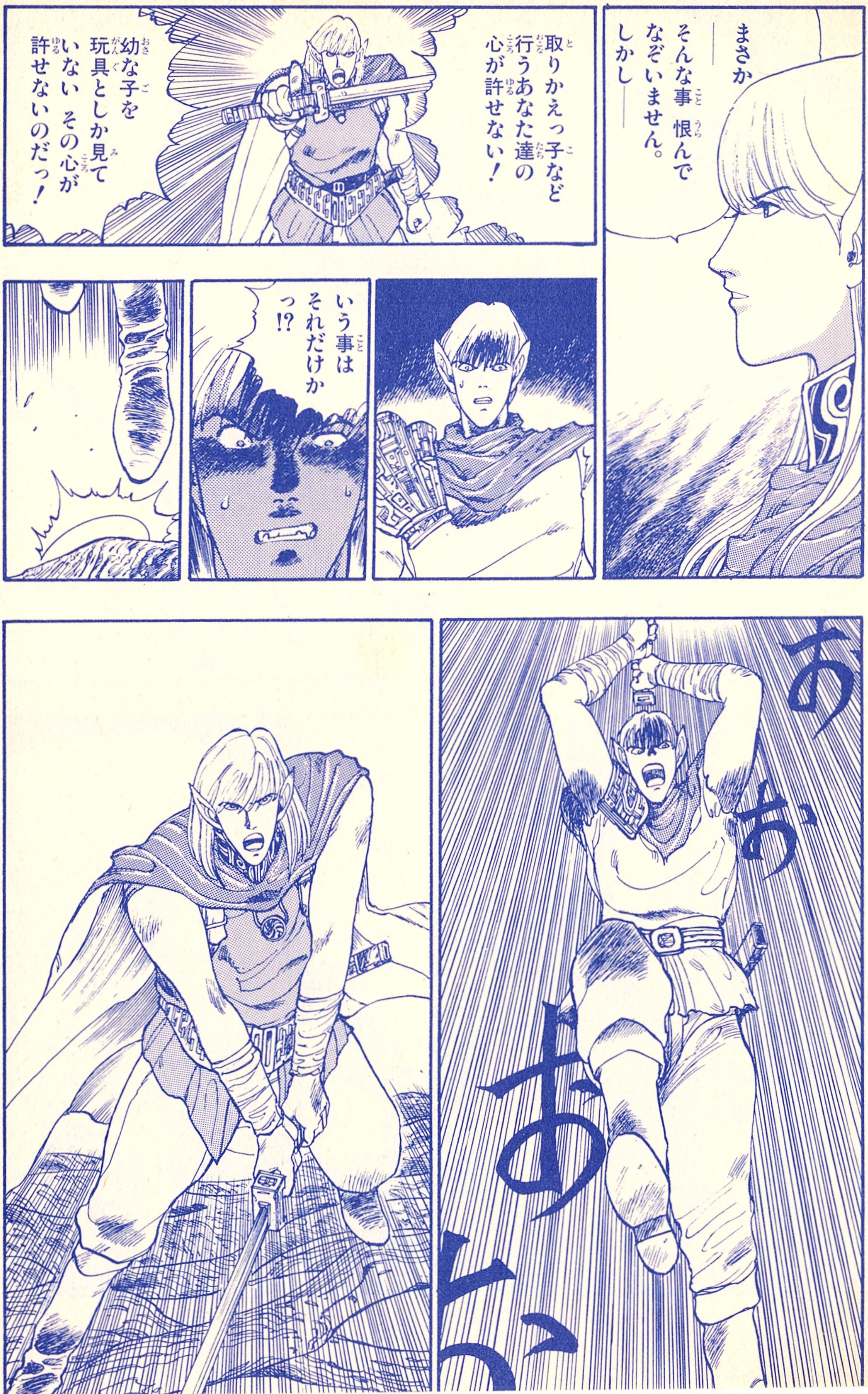


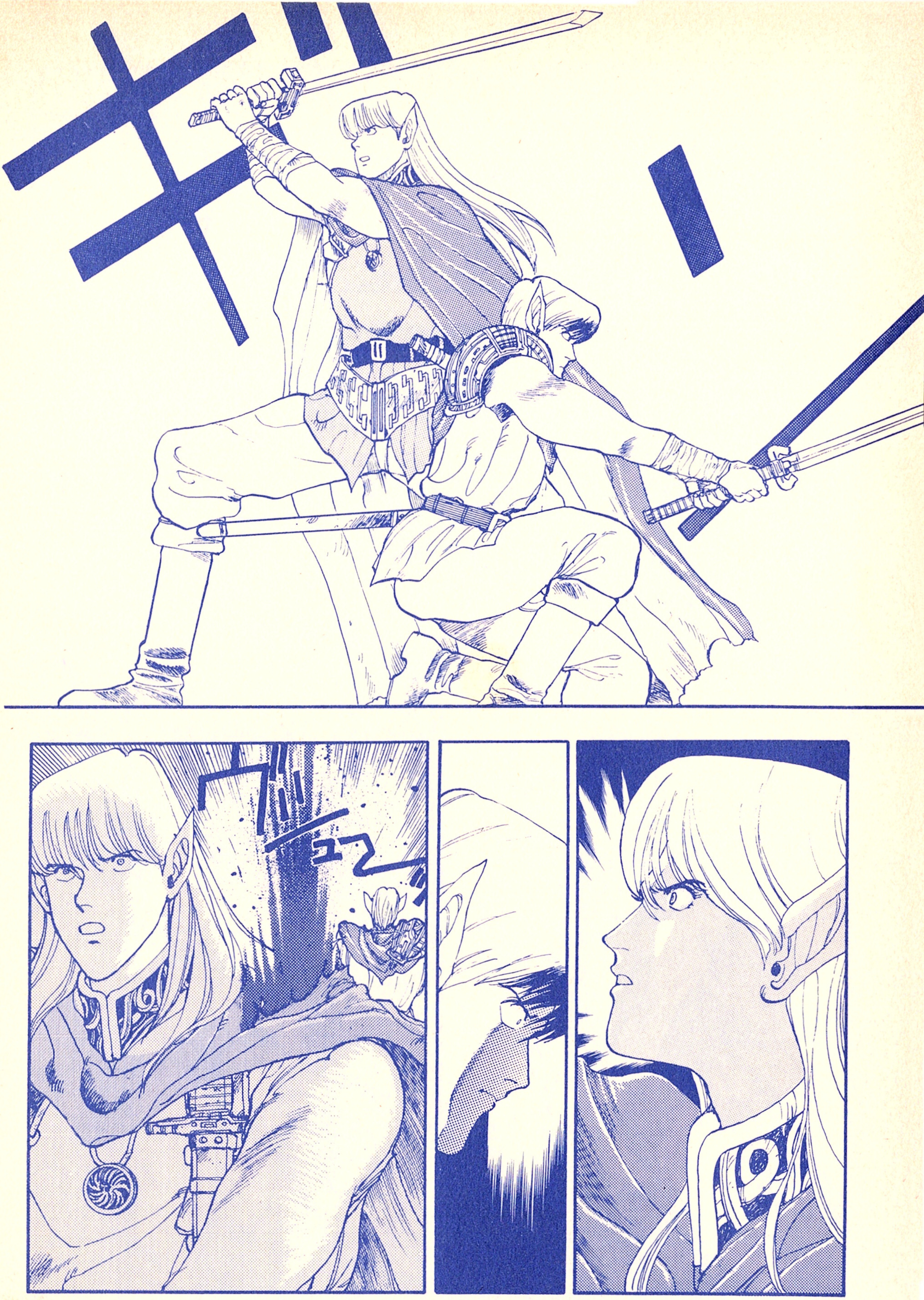
エルフたちとシーマの戦いが始まった!!

彼らの目的は!?


くそっ
……!!


こ、
こいつ、
強えーっ！
！
なぜだ
なぜ エルフの、
お前が、俺たちを
斬れるんだっ
ズ
私は、
取りかえっ子
なのですよ
だからか！
だから 俺たちを
恨んでいるんだな!!
エルフよりも
育ててもらった
人間の肩を、
持つのかっ!!


まさか——
そんな事 恨んでなぞいません。
しかし——
取りかえっ子など行うあなた達の心が許せない！
幼な子を玩具としか見ていない その心が許せないのだっ！
いう事はそれだけかっ!?
おおお


ギー



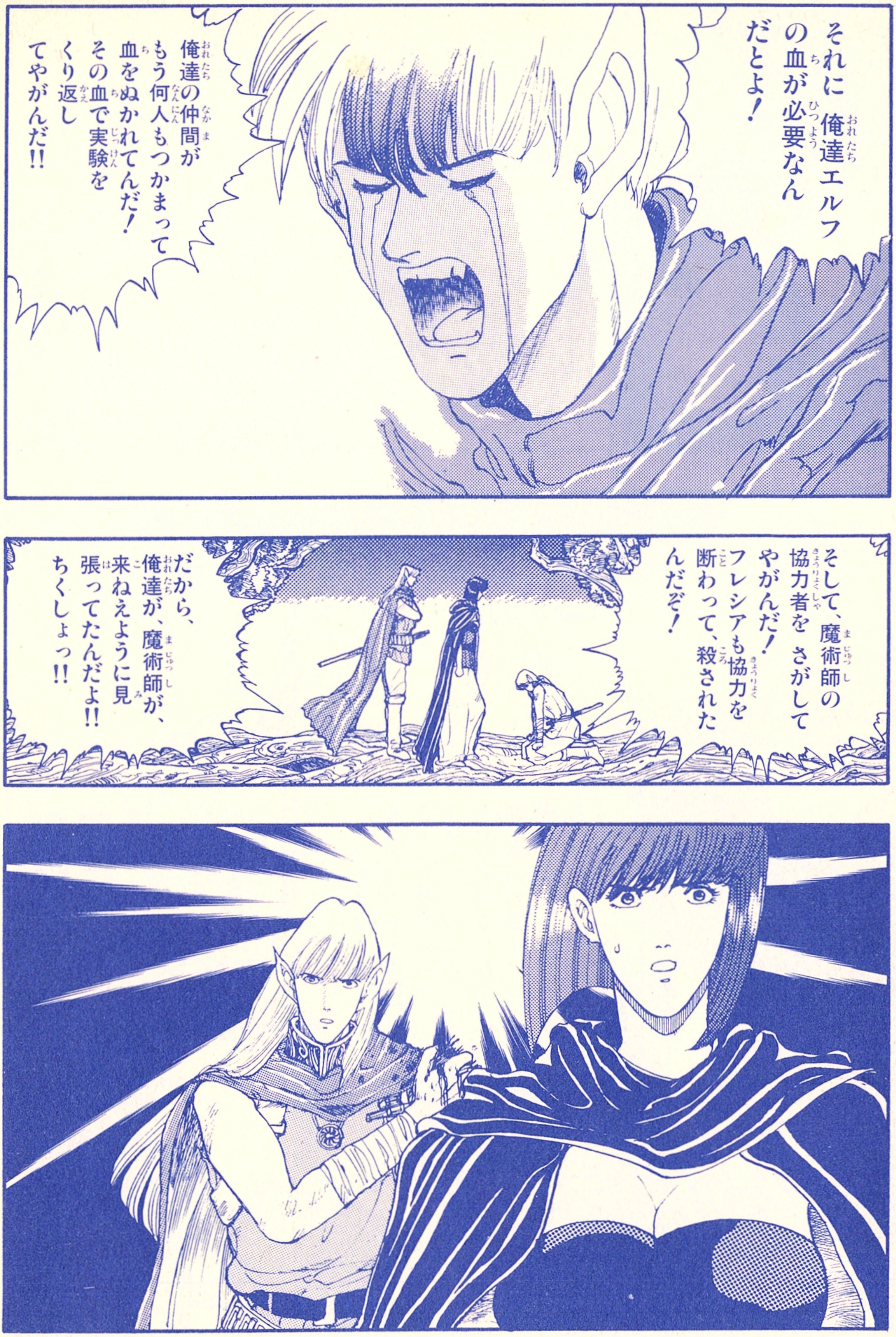
シーマ!!
いやーくっ!
ぱっぱしらっ
ぐっ
ズーン

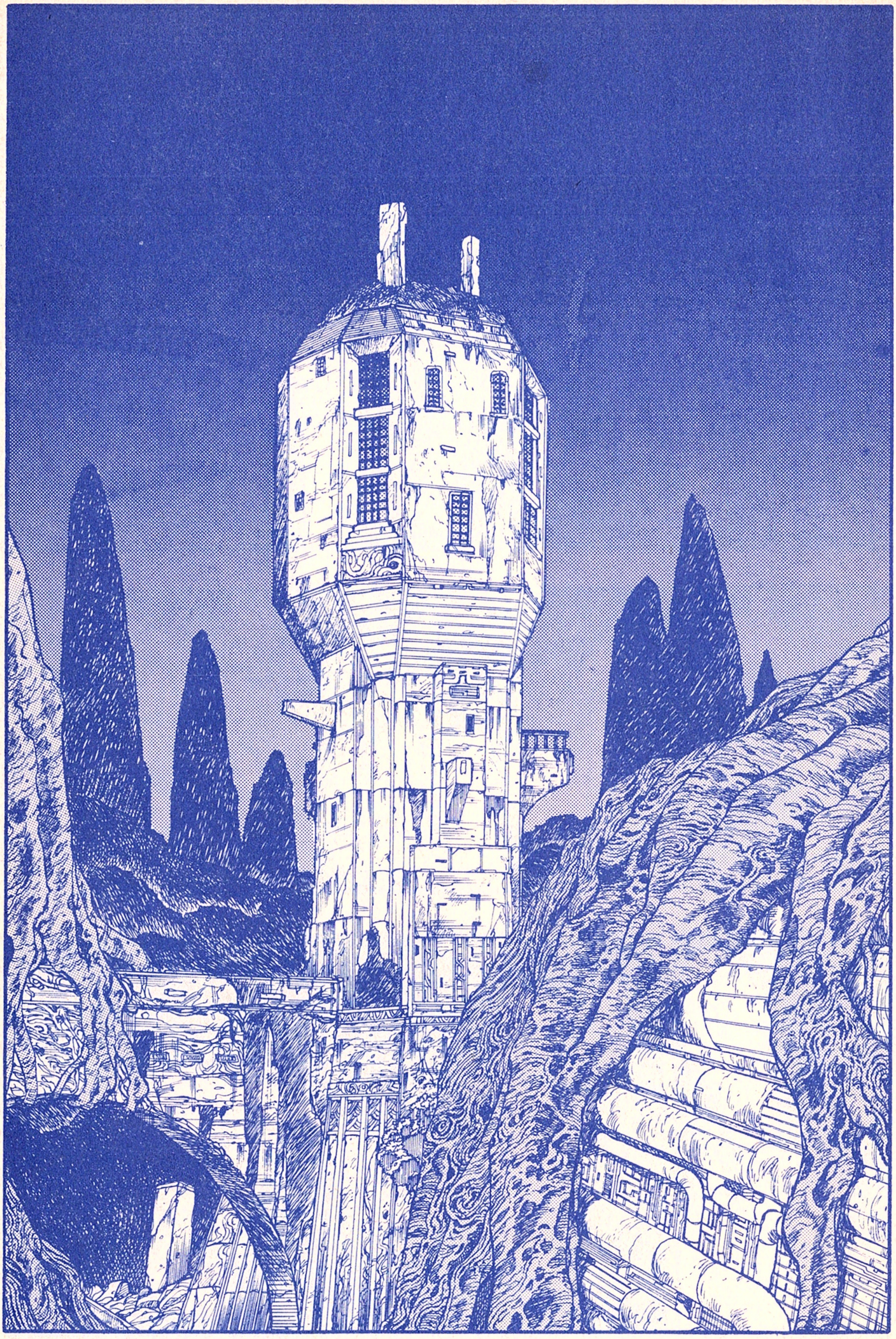

ま……魔術だ……
魔術を使いやがった……
人に対して魔術を使うのは禁じられてるけど
こうなったら、しかたない!
お前達、みんな吹き飛ばしてやる!!
グレイ!
ひっ


うわあああっ
どーなってんの?みんな逃げ出しちゃった……?
キッ
ひっ
ひえええっ
止まりなさい!!


!
止まらないと
そのまま、ヨミの
世界へ飛ばして
あげるわよ！
ひぃ
た
ヴーン
わ、わかった
わかったから
やめろーっ
答えなさい
なぜ、私達を
おそったのか!!
へっ
知るかよ！
あっ
そ！
わ、
わかった！
いう！
いうから
やめろーっ

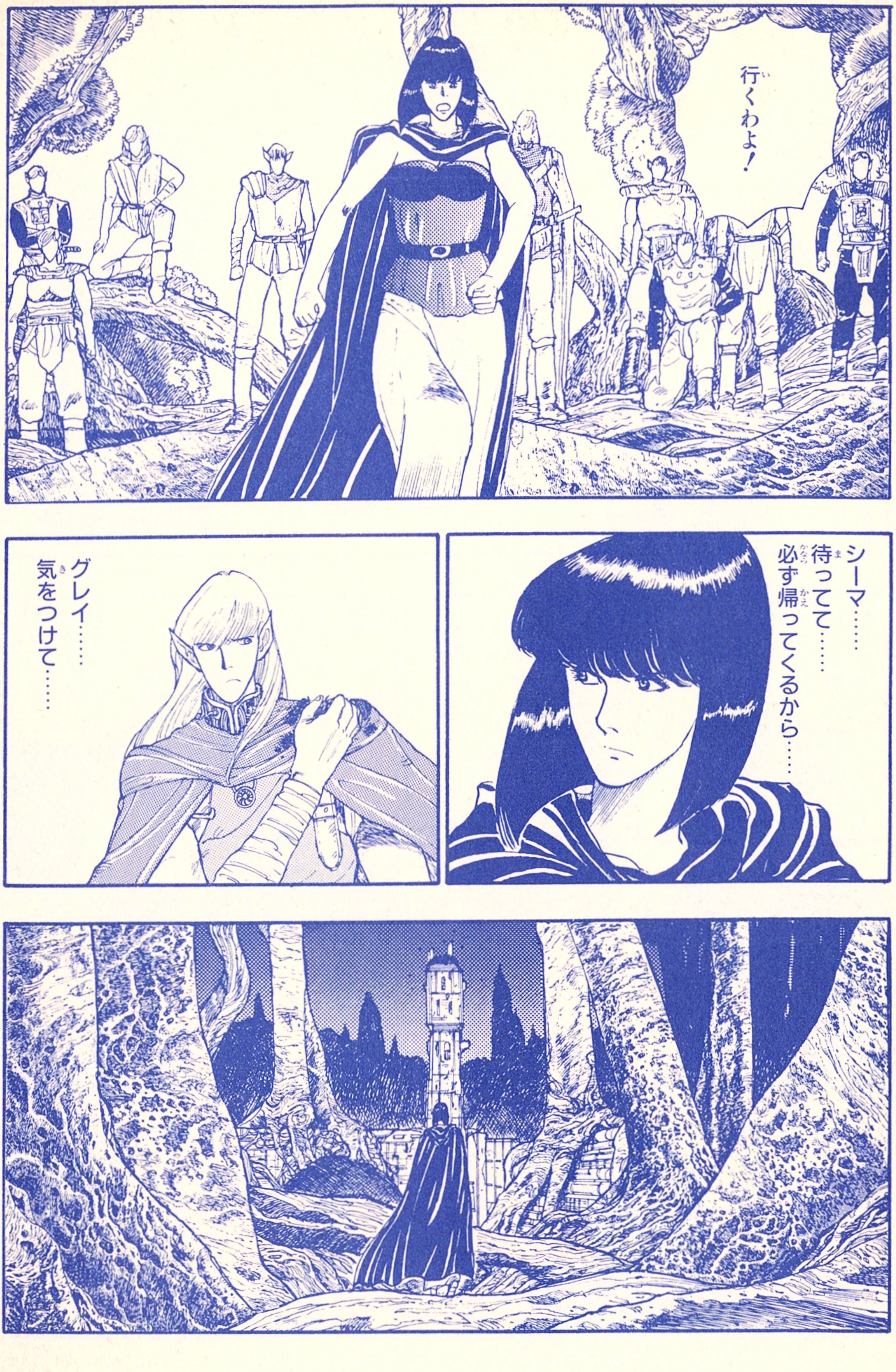

アクィナスの奴が錬金術にオレ達エルフの血を使ってやがんだ!
エルフの血…?
どういう事……?
オレに聞いても知るかよ!
わかった! いうよーっ!!
アクィナスは殺したフレシアの館にこもって錬金術にふけってんのさ! それも禁じられた錬金術の奥義を極める実験とかをなー!


それに 俺達エルフの血が必要なんだとよ！
俺達の仲間がもう何人もつかまって血をぬかれてんだ！その血で実験をくり返してやがんだ!!
そして、魔術師の協力者を さがしてやがんだ！フレシアも協力を断わって、殺されたんだぞ！
だから、俺達が、魔術師が、来ねえように見張ってたんだよ!! ちくしょっ!!




フレシアの館(やかた)――
アクィナス
そうじゃない
グレイ
こうだ！

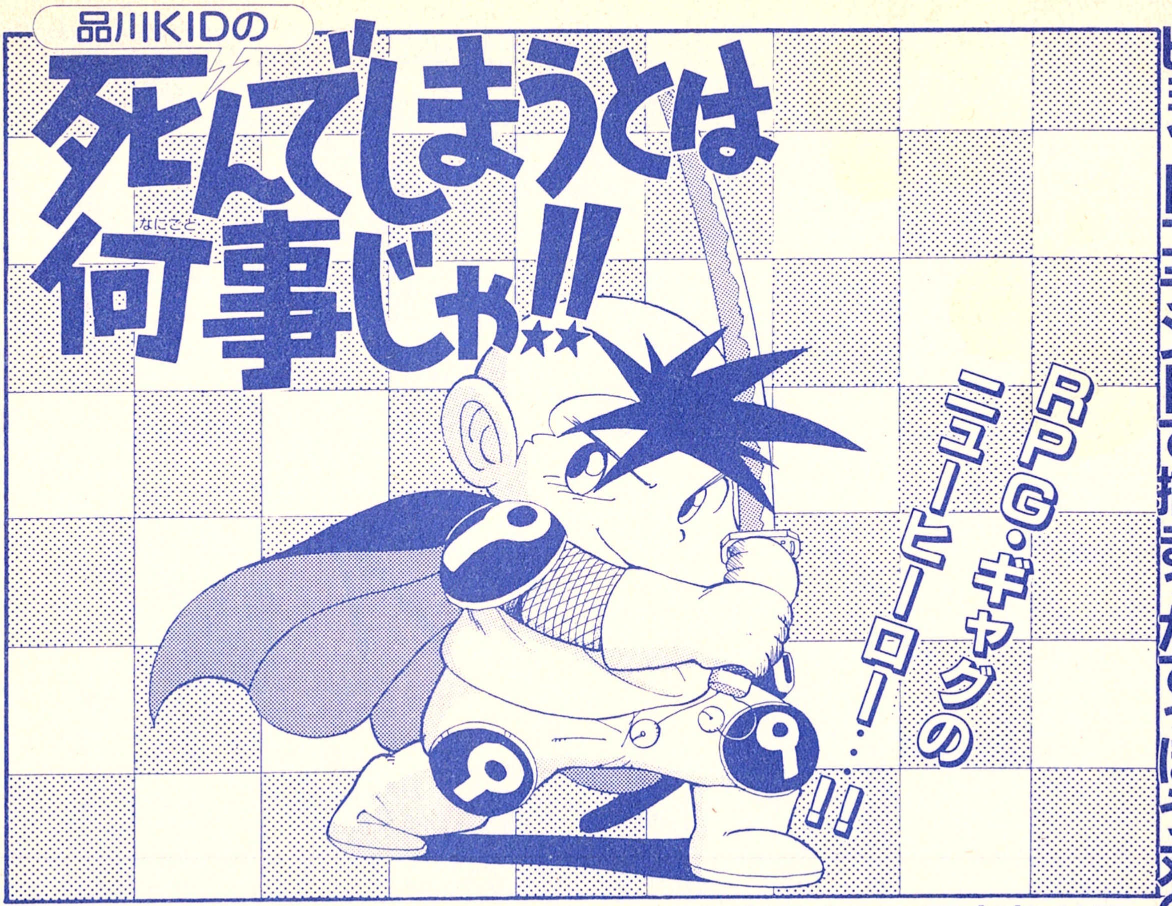

ばか グレイ！
アハハ！！
もうっ 兄さんは 黙っててよ！
ったく お前は へった くそだなーっ
なぜ なぜなの アクィナス・
あんなに明るく 優しかったあなたが
本当に 1人でいく のか？
うん やるだけ やってみる！ 私の兄のような 男だったの 私、ケリをつけたいのよ
ふ、 まあ いい、 だが、 裏切ったら
その シーマを たたき殺す からな！
誉り高い エルフのわりには せこいのねぇ 私、エルフって、 みんな シーマみたいに素敵 だって思ってたのに、 あなたに会って がっかりしたわ。
口のへらない 女だな お前はーっ かわいくねー
べーーっ
根が正直、 なのよ


行くわよ！
シーマ……
待ってて……
必ず帰ってくるから……
グレイ……
気をつけて……

グレイの前に立ちはだかる樹人たち。彼らはアクィナスの手さきなのか!?



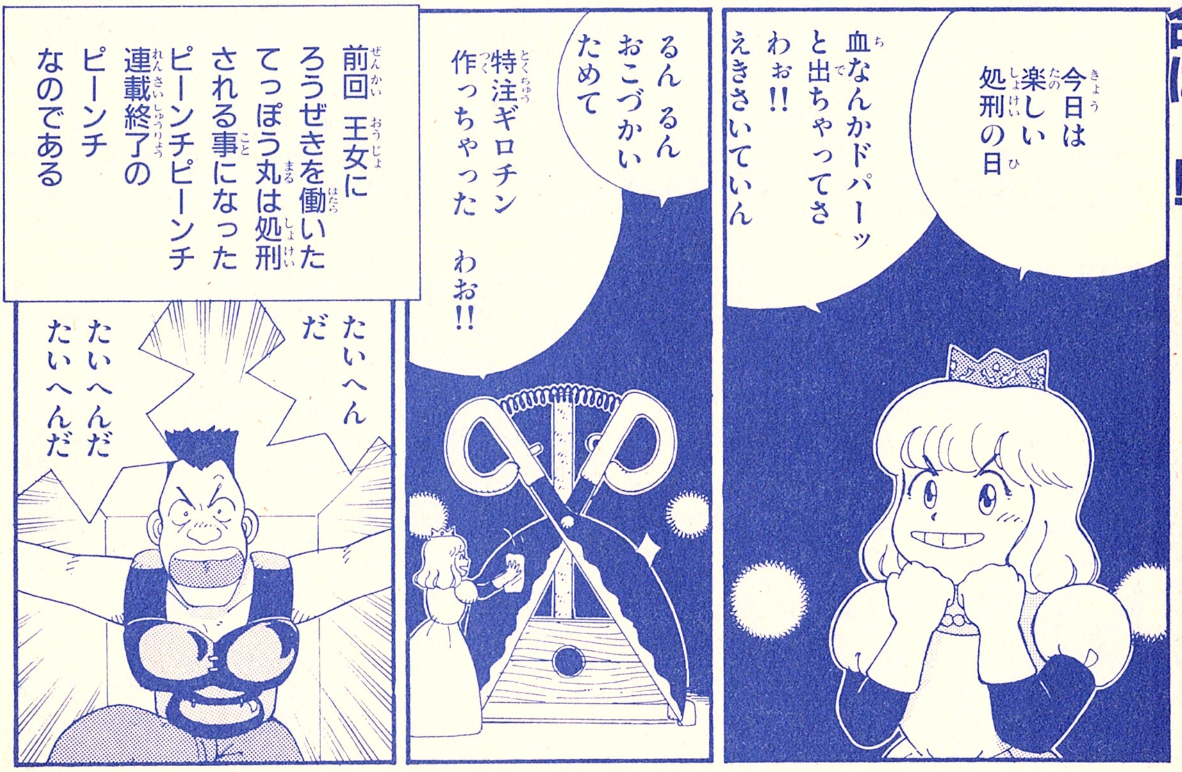
次号(Vol.8 4月6日発売)につづく!!

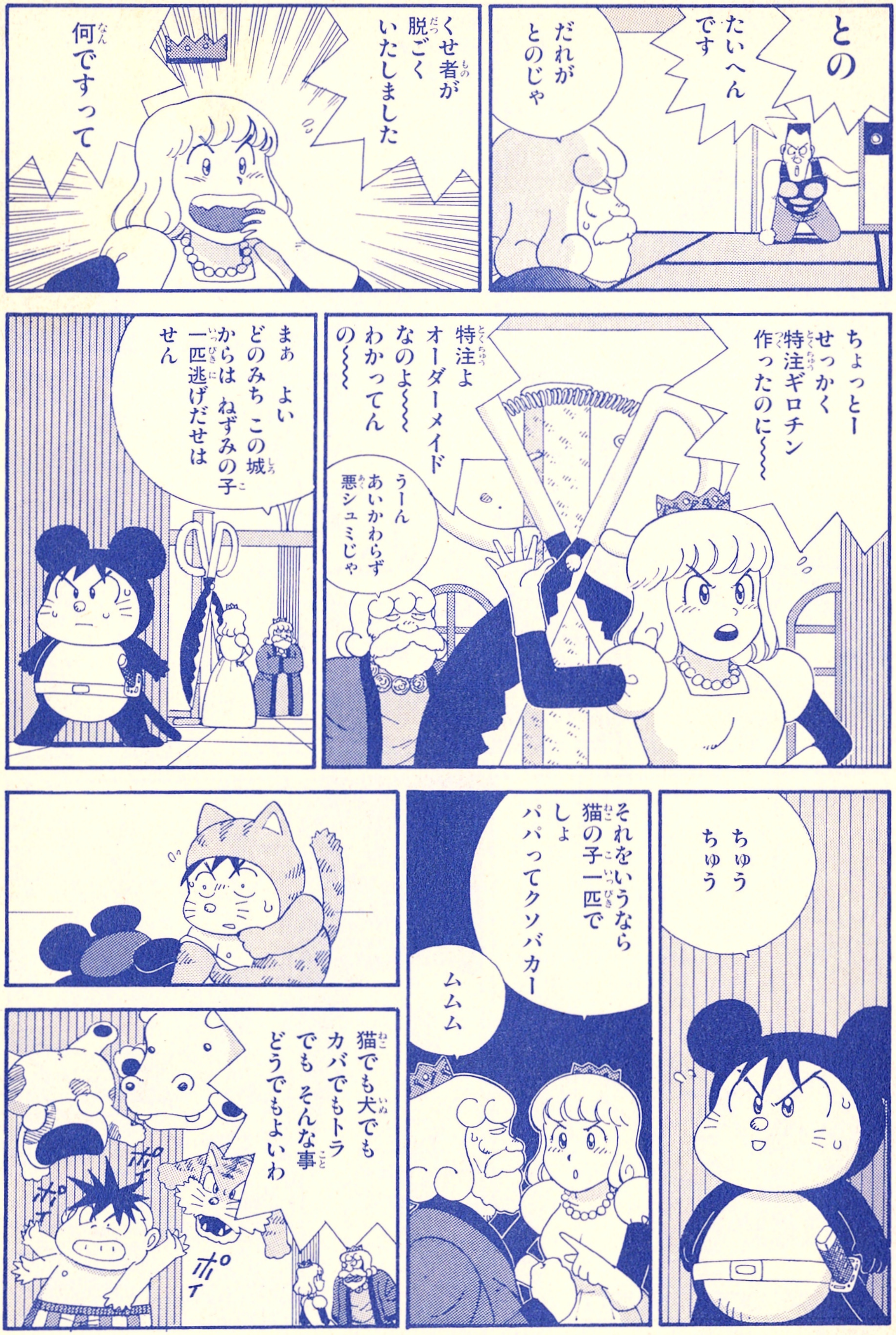


ヒョットコランドで捕まったてっぽう丸の運命は…!?

第3回

Presented by 品川KID




との
たいへんです
だれがとのじゃ
くせ者が脱ごくいたしました
何ですって
ちょっとー せっかく特注ギロチン作ったのに〜〜〜
特注よ オーダーメイドなのよ〜〜〜 わかってんの〜〜〜
うーん あいかわらず悪シュミじゃ
まぁ よい どのみち この城からは ねずみの子一匹逃げだせはせん
ちゅう ちゅう
それをいうなら猫の子一匹でしょ パパってクソバカー
ムムム
猫でも犬でもカバでもトラでも そんな事どうでもよいわ
ポイ
ポイ
ポイ



正義は勝つ！　でもまだ安心できないかも…。

Wizardry II

小説ウィザードリィII

風よ。龍に届いているか

第12回

静寂に包まれた冒険者の宿に迫る惨劇
捜索隊の帰りを待つ悪の冒険者に
妖獣と化したエレインが忍び寄る
駆けつけたジヴラシアが
そこで目にした光景とは



作／ベニー松山
イラスト／高橋政輝

〔第十二章〕炎上

俺とディーは冒険者の宿の中庭に実体化した。

転移の呪文によって、王宮のホールから直線距離にして約一キロメートルを瞬時に移動したのだ。この呪文の効力が及ぶほぼ最長距離を跳躍したことになる。

肉体の実体化に伴い、五感が急速に回復する。一度暗黒に染まった視覚はどんよりとした昼下がりの光を捉え、足下からはブーツの底を通じて短く刈られた下生えの感触が伝わってくる。

俺たちは、冒険者の宿から見て厩舎の影になる位置に立っていた。宿の中にいるものに気取られぬために、ここに実体化するようディーに指示したのだ。

五感の混乱から立ち直るや否や、俺たちは厩舎の壁に張り付くように身を潜めた。ディーを制し、俺は姿を見られぬように建物を窺った。

冒険者の宿は、静寂に包まれていた。

中庭に植えられた木々から鳥のさえずりが聴こえてくる。厩舎の中からは馬のいななきが漏れてきた。先刻の妖獣との死闘が幻だったかに思える穏やかさだ。

宿の入口や窓に人影がないのを確認し、俺は厩舎の影に身を戻した。

「静かね。何か聴こえた？」

ディーが顔を寄せて囁いた。俺の聴力はこのエルフも良く知っている。

「いや」

快癒の呪文で回復した右腕の調子を確かめながら俺は応えた。「静か過ぎる。まるで誰もいねえみたいだ」

「王宮に召喚された時には全員いたわよね。連絡待ちの間カードでもしてるって言ってたけど」

残留組の冒険者は、捜索に出た三パーティの悪の連中だ。僧侶が三人に戦士が二人、魔術師とビショップがひとりずつの合計七人。それに宿の人間を加えると十人以上がこの建物の中にいた筈だ。

前号までのあらすじ

精霊神グニルダの恩寵により、あらゆる外敵から守られ続けてきたリルガミン市。しかしその聖都も原因不明の天変地異に見舞われ、滅亡の一途を辿っていた。異変の原因究明のため王国は多数の冒険者を募り、街の北に聳える禁断の山〝スケイル〟に隠された神秘の宝珠の探索を命じた。

探索を続けて約一年。冒険者たちは自らの能力を磨き、山中の迷宮は宝珠の守護龍ルケブレスの護る最上層を残して全て踏破された。使命の達成は目前であった。そしてついに、主人公ジヴラシアのグループであるガッシュ、マイノスらの善のパーティが最上層の探索に出発したのだった。

しかし翌朝、一行は消息を絶った。捜索隊が急ぎ組織され、ハイランスの指揮する三隊の善のパーティが迷宮へと向かう。一方身動きの取れぬジヴラシアとディー、ザザは王宮に召喚され、王国の統治者ベイキ女王との謁見を行っていた。そこに善のパーティのひとりアルタリウスが現れるが、それはすでにアルタリウスではありえぬ奇怪な生物と化していたのであった。分裂、増殖を繰り返す妖獣に苦戦しながらも、重傷を負い生還したマイノスの援護で辛くも女王を救う三人。もうひとりの妖獣エレインが冒険者の宿に向かったのを知り、ジヴラシアとディーはすぐさま転移の呪文で跳ぶのだったが――。

主な登場人物

- ●ジヴラシア……主人公。レベル13の忍者。悪・人間族。この物語の〝俺〟。
- ●ガッシュ………レベル15の戦士。中立・人間族。
- ●ザザ……………レベル13の僧侶。悪・人間族。
- ●ディー…………レベル13の女魔術師。悪・エルフ。
- ●マイノス………レベル12のロード。善・人間族。
- ●フレイ…………レベル13の盗賊。中立・ホビット。
- ●ボルフォフ……レベル13の戦士。中立・ドワーフ。
- ●アルタリウス…レベル13の僧侶。善・ノーム。
- ●エレイン………レベル13の魔術師。善・エルフ。
- ●ハイランス……レベル13の侍。中立・エルフ。他のパーティを率いる。
- ●ベイキ女王……リルガミン王国の若き女王。
- ●ル'ケブレス…迷宮を支配する龍。〝平衡の守護者〟。

「みんな出払ってるってことは？」
「あり得ねえ。奴ら博打を始めたら五、六時間はぶっ通しだ。それに——」
俺は珍しく緊張した面持ちのディーを見やった。「気配はありやがる。なあ、連中が息を殺してカードをしてると思うか」
「それじゃあ——」
その後の言葉を、俺は頭の中で続けた。手遅れかも知れない、と。あの化物は人の躰に同化し、殖える。いずれもマスターレベルに達した連中と言えど、エレインになりすました妖獣に奇襲を受けたとすればなす術はあるまい。
「どうするつもり」
「忍び込む。連中が無事なら連れ出す」
「宿の中に？　あたしは御免よ」
言って、ディーは眉を寄せた。「独りで行く気なの？」
「そのつもりだ」
俺は懐から装束と同色の布を取り出し、顔の下半分を覆った。「宿の中で下手な呪文は使えねえだろ。自殺行為だ」
王宮のホールと異なり、この建物の内部には魔法を使うだけのスペースがない。食堂ならともかく、迷宮の回廊より遥かに狭い廊下で爆炎でも唱える羽目になったら、炎が溢れて術者自身を灼き尽くす恐れがあるのだ。館に侵入するつもりなら、ディーは戦力として度外視しなくてはならなかった。
「あんたこそ自殺行為よ！　あの化物が相手なのよ」
高くなりかけた声を必死に抑えながらディーは続けた。「それにこの様子じゃあ、エレインはもうことを起こしてるってことでしょう。だったら衛士隊が駆けつけるまで待てば——」
「交戦中かも知れねえ。息を潜めてな。それにあんな化物が襲ってきたからこそ、訓練を積んだ冒険者がひとりでも多く生き残らなきゃならねえんだ。怪物を見たこともねえような素人戦士が何人来ようと役には立たねえよ」

ディーは言葉に詰まった。選り抜きの衛士である筈の女王の近衛兵たちの醜態を考えると、並の兵士があの怪物を前にどれだけの働きができるかは疑問だった。
「——判ったわ。それで、あたしは何をすればいいのさ」
渋りながらもディーは頭を切り替えた。この辺りの思考の明快さはさすが魔術師といったところだ。今は議論を交わす時ではないのだ。
「俺が中に入ったら建物を回りこんで裏庭に行け。あそこには燃料入りの樽が幾つかあった筈だ」
「あるわ」
「俺の合図があるか、三百秒数え終わったらあれをぶちまけて宿ごと燃やせ。あと一回は爆炎の呪文が使えるだろう」
「呪文で着火しろっていうの？」
驚きを隠さずにディーが言った。「油の相乗効果で凄い火勢になるわ。この程度の建物ならあっという間に火に包まれるわよ」
「好都合だ。奴は耐久力はあるが、炎に強いって訳じゃなさそうだからな。今日は風がねえから延焼の心配もねえ」
「……ジヴ」
「何だ」
この美しいエルフは、二十センチばかり高い位置にある俺の目をまっすぐに見上げていた。
「三百数える前に、絶対に逃げなよ。でなきゃ死ぬよ」
感情を殺した声音だったが、俺を気遣っているのが判る。戒律は悪でも、仲間を危険に晒して喜ぶ者はいないのだ。
「へっ。俺が死ぬかよ」
「……」
不意に沈黙し、そしてディーは微笑んだ。
「余計なお世話だったわね。着火は任せて頂戴」
「頼んだぜ。数え間違うなよ」
言うなり、俺は厩舎の影から飛び出した。そのまま一息に開け放たれた玄関に駆け込む。背後で、ディーが裏手に回る気配がした。

俺は頭の中でカウントを刻み始めた。
ロビーには、何者の姿も認められなかった。左右に伸びる廊下を見渡し、妖獣が謁見の間のシャンデリアにぶら下がった光景を思い出して天井も見上げたが、異状はどこにも見られない。
だがこの建物のどこかから、押し殺しながらも強烈な気配が発散されているのが肌に感じ取れる。明らかに、それは殺気だった。
この殺気があの妖獣のものか、それとも居残りの誰かのものかは判らなかったが、すでに楽しくカードに興じていられる状況ではないということははっきりしている。
何人が残ってくれているか。
七人のうち、ドワーフのベインと人間のアーカムの二人は戦士だ。呪文が当てにならない以上この二人が食い止めているのを期待するしかない。しかし、確かにどちらも敵には回したくないタイプの男だが、いきなり襲われたとしたら武装を固める暇などないだろう。武器の重さを攻撃に活かす戦士が、素手でどこまで戦えるものか。
俺は殺気の元を探ろうとしたが、抑えた気配のせいか位置が摑めない。こんな時気配を自在に読む侍のハイランスがいてくれたらと、もどかしさがこみあげてくる。
連中が博打を打つのはいつも食堂だ。とりあえず俺は足音を立てぬようそちらへ走った。
広い食堂にも人影はなかった。ただ、テーブルの上にはカードが散らばり、まだ湯気の立つ茶のカップが置かれている。つい先ほどまで、連中はここにいたのだ。
食堂内を素早く一周するが、それ以上の痕跡は見られない。椅子も倒れてはおらず、慌ててこの場から移動したのではないようだ。
カウントは六十。約一分間がすでに経過した。
俺は食堂を後にした。
ロビーに駆け戻った瞬間、凄まじい気合いが館内の空気を震わせた。
それに続いて、何か重いものを水気を含んだ柔らかい物体に叩きつけたような鈍い音が響いた。
二階からだった。考えるより先に、俺の躰は階段を跳ね上がっていた。
今のが何の音かは明白だった。気合いはベインのもの、そしてあの濡れた音を立てるのは、粘液質の体液を全身に滲ませた肉腫の化物に違いなかった。
音はディーの使っているロイヤルスイートの方角からだ。もはや抑制せずに発散するに任せた激しい殺気も、そちらが戦場であることを示している。
一秒半で階段を昇りきり、その勢いを殺さずに廊下を疾り始めたその時、ベインのくぐもった絶叫が響き渡った。
同じ響きを持つ叫びを、俺は幾度となく耳にしたことがある。それは生物が断末魔にのみあげることができる、死の運命への呪咀の咆吼だった。
「ちぃいっ」
知らず、俺は叫んでいた。
もはや足音も気にせずに、廊下を疾駆する。
この館は、中庭を囲むように建物の両翼がせり出した造りになっている。廊下は中ほどで直角に曲がり、ロイヤルスイートのある突き当たりに向かう。
そこに辿り着き、減速して向きを変えた俺の視界には、王宮での戦いすら比べものにならぬおぞましい光景が展開していた。
七人全員が、そこにいた。だが、誰一人として生きている者はなかった。
全員が、廊下のそこここに倒れていた。そしてその屍のどれにも、分裂した肉腫が張り付いているのだ。
ロイヤルスイートの扉にもたれるように絶命しているベインは、まだ分裂直後の小さな肉腫が口腔に潜り込もうとしているに過ぎない。しかし、他の六人はもはや躰の半分近い大きさの妖獣に取り憑かれ、増殖のための苗床と化していた。僧侶のブライスは、すでに原形すら留めぬほど喰い尽くされている。
ベインの屍の少し手前に、一際大きな妖獣が直立していた。俺が斃し



た奴よりもさらにでかく、ひょろりと立った姿は人間かエルフを丸々呑み込んだかのようだ。

そいつには緑の触手の他にもう一本、ピンクの肉がそのまま盛り上がったような太く長い管が生えている。そこがこの化物の頭部に当たるとするなら、この管は口なのかも知れない。恐らくはこの姿が、肉腫が完全に成長した状態なのだろう。

二本の触手はベインの両腕を捉え、伸びた口は防具を着けていない無防備なドワーフの腹部に潜り込んでいる。この戦士がどのように絶命したのかが、俺にも判った。

そいつの触手の付け根の少し下に、幅広の長剣がめり込んでいた。ベインが裂帛の気合いとともに叩きつけたものだ。

それが見る間に押し返され、弾き出される。ごとり、と重い音を立てて段平は床に転がった。

ベインがいつも使っている武器ではなかった。奴は邪悪の斧と呼ばれる重戦斧を好んで使用していた。扱うには卓抜した腕力を必要とするが、使いこなせれば鉄を飴のように切り裂く魔法の武器だ。

もしその戦斧だったら、ベインは少なくともこの妖獣だけは斃すことができたかも知れない。が、抜け目のないドワーフも宿でまで武装している訳ではなかった。

長さ十五メートルばかりの廊下に、大小八体もの妖獣が蠢いていた。

そしてそれまで音もなく冒険者たちの血肉を啜っていたそれらは、俺に気づいたのか一斉に哭き始めた。

手遅れだった。連中は巧妙におびき出され、一掃されたのだ。

じゅうう、と母体であろう巨大な妖獣が湿った哭き声をあげた。俺にはそれが、遅過ぎた警告者に対する嘲りのように聞こえた。

そいつはベインの屍を放すと、身をよじってこちらを向いた。

不覚にも、俺は呻いてしまった。

管状の口のすぐ上に、身の毛のよだつものがあった。

顔だ。エレインのデスマスクが、あたかもそれがこの化物の顔であるかのように肉腫と融合していた。

何より不気味なのは、その双眸だった。かっと見開いた眼窩にはまっているのは、人の眼ではなくあの緑の球体なのだ。

緑の眼球がずるりとせり出し、また引っ込んだ。俺の姿を視覚で認識したらしい。

年若いエルフの面が、皮膚の下で無数の蟲が蠢動しているかに波打った。それが、嗤う。

整ったエレインの貌が、わずかにバランスを失っただけでこんなにも変わるのかという、異様な嗤いの表情だった。唇がめくり上がり、血の気を失った歯茎とどす黒い舌がちらりと覗く。

そこから低い言葉が漏れた。獣の唸り声に似てはいたが、それは間違いなく共通語だった。

「やはり、しくじったか――」

女王を襲ったアルタリウスの錯乱した語調とは異なり、高い知性を感じさせるしっかりした口調だった。それが、完全に妖獣と化したエレインの口から発されているのだ。

「驚いているのか、ジヴラシア？　それともこの姿が気に入らないのかい。僕は、こんなに良いものだとは思わなかった」

ずるり、とそいつは下半身も向き直らせた。「快適だよ、この肉体は。受け入れればいいんだ。アルタリウスは意識で拒んだから、正気を失ったのさ。僕はこの生物を支配した」

言葉を紡いでいるのは、エレインだった。この肉腫は、人の意識さえも喰っている！

「君も仲間になるべきだよ。この躰なら、天変地異の中でも生きていける。いや、異変でもっと、僕たちに棲みやすくなる！」

俺は妖獣がじわじわと近づいてきているのに気づいた。語りかけながら間合いを詰め、俺も同化してやろうという肚だろう。

だが、俺もこいつの話の端々に興味を惹かれた。

「おい、俺の言葉も聞こえるか」

「判るさ。僕はエレインだ」

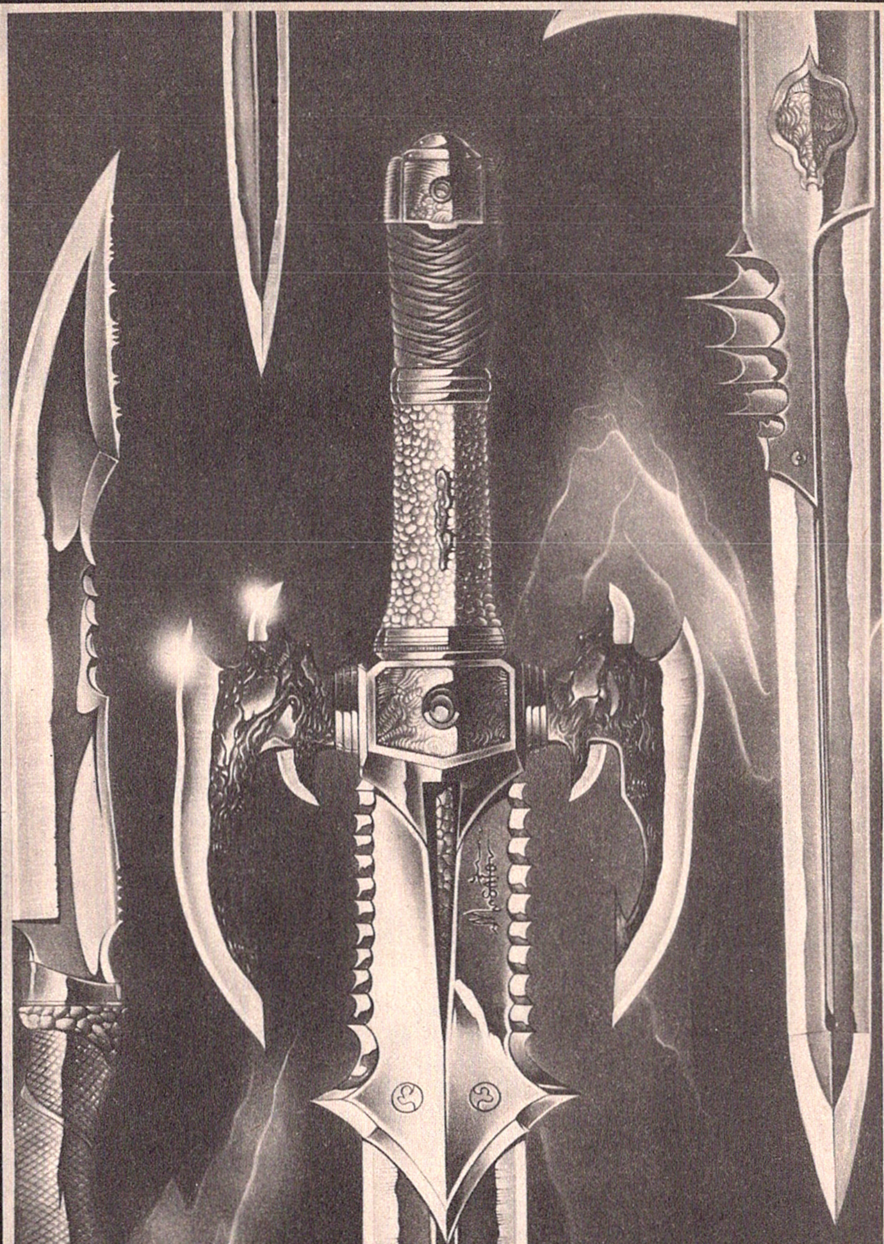
「本当にその躰を支配しているのか？　えらく便利そうじゃねえか」

妖獣のにじり寄るスピードがわずかに落ちた。俺の対応に少し戸惑ったようだ。
「そう、優れているよ。今も見ただろう。傷はすぐに塞がるし、分裂して仲間を増やすこともできる。彼らも――」
そいつは喰われている悪の冒険者たちを触手で指し示した。「じきに僕と同じようになる。少し抵抗されたけど、目が覚めたらきっとありがたく思うだろう。まず最初に、女王陛下と冒険者の仲間たちにこの気持ちを味わってもらおうと思ったのさ」
「へえ。そりゃ気づかなかった」
距離は詰まっていた。俺と妖獣の間はすでに十メートルを切っている。
「それで、異変が進むと何で棲みやすくなるんだ？」
俺のこの問いに、エレインの瞼が真意を探るかのように見開かれた。が、妖獣はそのまま会話を続けた。
「ここは大気に必要な成分が少な過ぎる。地割れで地底から噴き出すガスは、その成分を補って僕たちの躰を活性化してくれる。余計な働きをする植物は枯れつつあるし、良いこと尽くめだ」
意味は良く判らなかったが、俺はこの話を覚えておくことにした。
「なるほど。その躰になっちまえば、わざわざ天変地異の原因を探りにいくこともないって訳か」
「そうさ。怯えることなんかない」
「糞喰らえだね」
「何だって」
「厭だね。てめえはもうエレインなんかじゃねえ。肉腫に記憶まで乗っ取られた薄汚ねえ化物だ」
ぎちっ、と妖獣が吼えた。エレインのマスクが歪み、何か別の生物のような顔になる。
いきなり妖獣の速度が上がった。脚がないとは思えぬ凄まじい速さだ。恐らくは床との接地部分に、超高速で運動する無数の触脚でもあるのだろう。
「ジヴラシア、仲間になれ」
五メートルの距離から唸りをあげて、あの口が刃の切っ先のように伸びてきた。緑の触手より遥かに伸縮する恐ろしい武器だ。
吸盤状の口腔部が、俺の顔面を襲う。
それより早く、俺はもと来た廊下を駆け戻り始めていた。
一瞬前まで俺の頭があった位置を妖獣の口管が貫き、背後の壁に吸いついた。触手が鞭ならこいつは槍だ。
動きが早いとは言え、この軟体生物と俺では走る速度は比べものにならない。妖獣の本体が曲がり角に達した時には、俺はすでに階段の最上段から踊り場に向けて跳躍していた。
カウントは続けていた。途中に乱れはあったが、一階に着地した時点で三百まで残り三十秒。
階上から、妖獣の悔しげな咆吼が響いた。
構わず俺はロビーに疾った。そして中庭に躍り出る。急がなければ、あの化物が外に飛び出す時間を与えることになる。
「ディー！」
俺はありったけの声を振り絞った。「脱出した！　着火しろ！」
一瞬の静寂があった。
声が届かなかったか、と思ったその時、館の裏側から閃光が疾った。
鈍い轟音とともに、屋根の向こうからオレンジ色の炎が噴き上がる。
次の瞬間、爆炎の業火が冒険者の宿を覆い尽くしていた。

（次号に続く）

特報!! ウィザードリィ外伝①ギルの迷宮 絶賛発売中!! 書店へ急げ!!

●巻末特別企画として、ベニー松山責任編集ザ・ベスト・オブ・ウィザードリィ友の会がついてきます!! お見のがしなく!!(定価九〇〇円税込)



▶ファンタジーランドは
(P108)からお読み下さい。